助産師の道を選んで

江見　　遥

国立病院機構高知病院　助産師

「私もこんな風に患者さんと関わっていきたい」。母性看護学の実習中に出会った、ある助産師さんと産婦さんとの関わりを見て、私も助産師の道を選ぼうと決めました。私が看護学科に進学したのは、「人の役に立つ仕事がしたい」「自分の能力を生かせる仕事がしたい」という思いでしたが、どんな看護師になりたいのか、どんな道に進みたいのか、という将来については漠然とした状態でした。そんな中、実習で出会った助産師さんの産婦さんに寄り添い、一緒に出産に向けてサポートしている姿や、助産師さんを信頼し出産に臨んでいる産婦さんとの関係に感動し、自分もこんな関係が築ける看護をしたいと感じました。自分の進む道が見えると、それまでなんとなく勉強していた看護がとても面白いものに感じるようになりました。

助産師教育課程を卒業後は、実習先としてお世話になった病院に就職しました。新人看護師への教育体制を含めたキャリアパスの制度が整っていたことと、実習先での体験から、ここでなら自分の力が発揮できるのではないかと感じたからです。

最初の１年は、とにかくあっという間でした。学校で習得していたと思っていた技術も、

実際に臨床で実践するには大きな差があり戸惑ったり、実習と違って一度に多くの人を受け持つことで混乱したり、覚えなければならない事がたくさんあったりと、１日１日を乗り切ることで精いっぱいで、自分自身を振り返る余裕なんてありませんでした。その当時は上司や先輩が、「これは勉強した方がいい」「この研修は行った方がいい」とアドバイスをしてくれたことについて勉強することに一生懸命でした。

２年目を過ぎると少しずつ余裕が出てきて、自分が行いたい助産とは何か、どんな助産師になりたいかを考えるようになりました。自分から研修を調べて参加したり、病棟の研究に参加したり、学会に参加したりして色々な考えを学ぶ機会を持つようになりました。自分の将来について母校の先生と話をしたこともあります。さまざまな人と話をしていく中で、少しずつ自分のなりたい助産師像を改めて考えました。また、臨床で経験を重ねていくと、知識と自分の経験がすっと自分のものになる瞬間が多々あるようになりました。学生の頃はただ学ぶだけだった知識が自分のものとして生かされていると感じると、もっと学びたいと感じるようになりました。

私も現在就職して5年目となり、プリセプターとして新人指導に関わったり、実習生の指導に関わったりと、それまでの学ぶ立場から、少しずつ教育する立場を担うようになりました。プリセプティや実習生を見ていると、自分も同じような時期があったことを思い出し、懐かしい気持ちになると同時に、本当に多くの方に支えてもらっていたことに改めて気付きました。当時の自分と同じように困っていたり、悩んでいたりしている後輩をサポートする一方で、新たな考え方を教えてもらったり、一緒に振り返ったりと、相互に学びながら一緒に成長していけるように取り組んでいます。また、教育する立場になることで、それまで学ぶ側では分からなかった視点を持つことができるようになってきました。看護の世界では日々学んでいく姿勢が大事です。私自身もまだまだ学びの途中、道の途中ですが、少しずつ前進していけるよう取り組んでいきたいと思っています。